

前途 ようよう

- z e n t o y o y o -

2017.07

VOL.2

高齢者介護業界のあの人この人に、これからの高齢者介護についての予測や展望をお聞きするインタビューコーナーです。

vol.2 社会福祉法人北海道社会福祉協議会 事務局次長 中村 健治 様



【北海道社会福祉協議会】



【中村健治様】

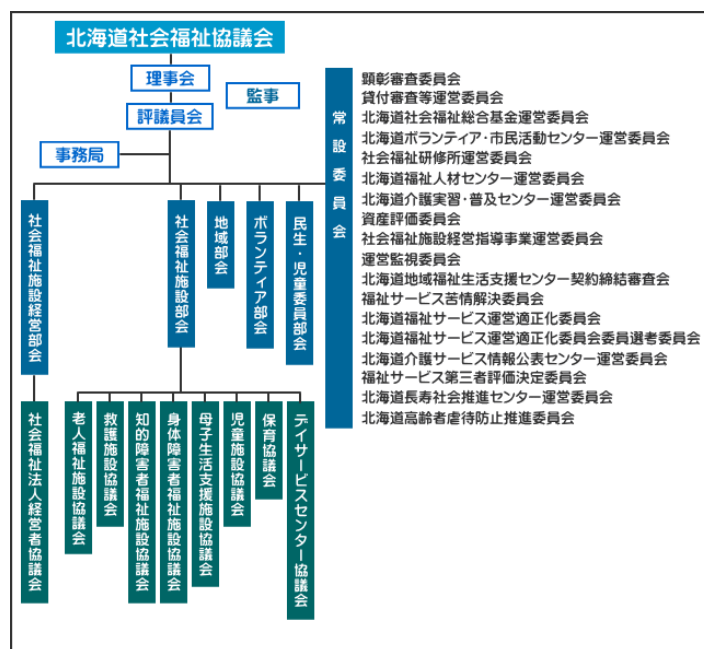
1. 貴協議会について教えてください。

社会福祉協議会は、地域社会において民間の自主的な福祉活動の中核となり、住民の参加する福祉活動を推進し、保健福祉の諸課題を地域社会の計画的・協働的な取り組みによって解決しようとする公共性・公益性の高い民間非営利団体で住民が安心して暮らせる福祉のまちづくりと地域福祉の向上を旨とすることを使命としています。

北海道社会福祉協議会は、戦後の混乱期に社会福祉事業をすすめてきた北海道民生委員連盟、北海道社会事業連盟、同胞援護会北海道支部、北海道民生部が世話人となり、昭和26年3月25日、札幌市において設立総会が開かれ、誕生をみました。翌27年6月18日、厚生大臣より社会福祉法人として認可をうけ、「社会福祉法人北海道社会福祉協議会」として設立されました。

今日、社会福祉の潮流が地域福祉、在宅福祉に向かっておりますが、民間の立場で北海道における明るく住みよい地域づくり、福祉のまちづくりをすすめるため、市町村社会福祉協議会の育成、支援を通じボランティア、町内会自治会関係者、民生委員児童委員、福祉施設関係者、NPO 団体などとの連携による地域福祉の実践活動に取り組んでおります。

また平成12年4月よりスタートした介護保険制度を踏まえ、多くの市町村社会福祉協議会、老人福祉施設では介護保険サービスの指定事業者として、介護の最前線に立ち、質の良い介護サービスの提供に取り組んでおりますが、こうした介護問題を「地域の視点」に立って積極的な取り組みを推進しています。また平成12年4月より14総合振興局等に本会の地区事務所を開設し、より地域に密着した福祉活動の推進を図っております。



【組織図】

2. 中村様のご経歴、現在の業務内容を教えてください。

北星学園大学（文学部社会福祉学科）卒業後、特別養護老人ホーム芦別慈恵園生活指導員を務め、その後北海道社会福祉協議会に入局し福祉人材部長（北海道社会福祉研修所長や北海道介護実習センター所長）を務めていました。

現在は北海道社会福祉協議会・事務局次長、生活支援部権利擁護担当部長、高齢者総合相談・虐待防止センター所長、地域福祉生活支援センター所長、災害ボランティアセンター副センター長を兼務しています。

社会福祉協議会は、全国の都道府県・市区町村で地域福祉を推進する組織として活動し、行政と連携しながら、住民主体を原則としてフォーマルサービスとインフォーマルサービスを一体的に進めていくのが社会福祉協議会の仕事となります。

なお、昨今の認知症高齢者の増加や障がい者の地域移行が進められるなか、在宅ケア等における環境整備として福祉用具・機器並びに介護ロボットは重要なツールとなっています。しかし、北海道の地域特性としての各メーカーからの移動距離などの広域性や雪国としての気候問題など、年間を通してなかなか製品が普及していかないことを実感しています。このような北海道の地域性から他の都市で普及している素晴らしい製品を見たことがなかったり、知らないことがたくさんあります。そんな普及に関して悩みを抱えていた北海道介護実習センター所長の時に、テクノスジャパンの「ケアロボ」に出会いました。

3. 高齢者ケアについて

北海道社会福祉協議会でのお取り組みについて教えてください。

高齢者本人が自立してできないこと、やりたいことを明確にして、できないこと、やりたいことを周囲が支援・サポートしていく仕組み作りを行っています。

本人自らが、回復していく段階でできなかったことができるようになるには、福祉用具・機器などのツール、環境要因が大きなポイントになると思っています。例えば、入院している段階で如何に在宅環境に近付けるかが重要ですが、施設・病院で使用できた用具・機器が在宅環境で使用できないものが多く困っています。施設・病院、在宅環境の両方で共通して活用できる福祉用具・機器が増えれば、介護・看護サービス従事者や在宅介護者などの身体的・精神的負担軽減にもなり、より質の高いサービスを提供できるようになると思っています。

環境変化に左右されることなく使用できる福祉機器のひとつが、「ケアロボ」だと思いましたので、実証事業に参加して活用を始めました。

※経産省・ロボット介護推進プロジェクトの実証報告は下記 URL からご覧ください。

http://www.technosjapan.jp/correspond/charge/pdf/home02i_carerobo.pdf

4. 福祉用具・機器とのかかわりについて

福祉用具・機器があつて助かった事（活用メリットなど）を教えてください。

一番最近では、テクノスジャパンの「ケアロボ」の活用による効果だと思います。

施設・病院、在宅の環境を問わず活用できる点、被介護者の尊厳確保や介護者の負担軽減に繋がった点は実証事業で報告の通り効果が出ています。例えば、ケアロボを施設で運用した場合、入居者の離床行動を「ケアロボ」からのメールで知って介助できましたが、タイミングが間に合わず残念ながら受傷をされた場合にも、「ケアロボ」が撮影した写真を用いてご本人やご家族への詳細説明ができたことがありました。それと、ご家族が被介護者の様子をいつでもケアロボのカメラで見ることが出来た事によって、日常の施設の対応に理解が深まり、施設とご家族の信頼関係が深まったケースがありました。

栗山町では在宅介護環境で「ケアロボ」を活用しました。以前は定刻に家族がトイレ介助を行っていましたが突発的な徘徊行動の対処に困って、介護のために離職する事も考える家族のケースがありました。そこでケアロボの写真機能を上手く使って、本人が動き出した時の服装や戻ってくるまでの経過時間などを参考に、本人の行動を把握できるようになったことが介護者にとって大きなメリットになり、仕事をしながら安心して介護生活を送れるようになりました。

高齢者と福祉用具との関係性の話になりますが、シルバーカーに乗ってゲートボールに行く高齢者の話を聞いたことがありますか？「ゲートボールをしている高齢者が何故シルバーカーに乗って移動しているんだ」との話です。皆さんはどう思われますか？色々なご意見があると思いますが、この高齢者の目的は仲間とゲートボールをすることです。もし、シルバーカーを使用しない場合、疲れて仲間とゲートボールができないかもしれません。そうすると、「疲れるからゲートボールにはいかない。」ということになり、人間関係や外に出るといことがなくなることになるかもしれません。私は福祉用具・機器に関して家族や専門家を含めて住民理解が低いことや、介護用具・機器の情報が少ないと思っています。環境や時間帯を限定した場合でも、福祉用具・機器を使用する事で生活スタイルが変わり、身体機能が回復する場合もあると思っています。

現在、全国福祉用具専門相談員協会では「道具に使われるのではなく、道具をどう位置付けるか」が重要だと言われており、人的対策だけでなく用具を効果的に使用する物的対策が介護イノベーションとして話題になっています。

こんな福祉用具・機器があれば良いと思うモノを教えてください。

「あったらいいな」というよりは、人と道具の関わりが「こうなれば良い」と思うことはあります。それは、用具・機器に人が振り回されるように使用するのではなく、用具・機器を上手く選択し活用する事で、対象者や介護者の心身に余裕が生まれるという考え方です。特にこれからは超高齢社会・少子化の中で介護人員不足がますます進むこととなります。補助者の増加やコーディネーターのスキルアップも大切ですが、福祉・介護以外の他業種の人材がケアの現場においてスキルや経験を有効に活用できるような働き方改革やチームケアの構築が重要になってくると思います。そこでのポイントは環境因子である福祉用具・機器並びに介護ロボットであるといえます。そのためには、これまで使用したことがない福祉用具・機器が出てくるなかで、対象者と介護者の両方に心身の余裕ができるよう、情報を得た上で用具・機器を上手く選択し、活用する姿勢が重要だと思います。そうなれば、きっとサービスも更に充実したものに変わっていくと思っています。

5. これからの高齢者ケアについての展望や期待、夢を教えてください。

現在、福祉現場におけるマンパワー不足が叫ばれていますが、それを補うように進化して付加価値がついた「福祉用具や機器」（ツール）がますます市場に出てくることによって、人と環境の課題を上手くクリアすることができ、ツールと人がマッチングした、もっと密接な関係になっていると思っています。

安全は福祉機器・用具が担い、安心は人が担う。誰もが住み慣れた地域（家）で安全・安心に住み続けたいと願っており、そのために今、介護のイノベーションが不可欠だと思っています。

国が推進している「我がごと、丸ごと地域共生社会」における人材問題や環境問題に対して福祉用具・機器への期待は大きいと実感しています。

テクノス通信 Home（2017年7月発行）より